単語の虚記憶における言語情報と位置情報の保持(3)

— 日常記憶との関連 —

○松田崇志・清水寛之

(神戸学院大学 人文学部)

キーワード：虚記憶・DRM パラダイム・日常記憶

Retention of verbal information and positional information in false memory of words (3):

In relation to everyday memory

Takashi MATSUDA and Hiroyuki SHIMIZU

(Faculty of Humanities and Science, Kobe Gakuin University)

Key Words: False memory, DRM paradigm, Everyday memory

目 的

本研究では、実験室場面における記憶と日常的な記憶の関連について検討する。典型的な実験室研究として DRM パラダイムを採用し、日常的な記憶を測定するために、日本版の日常記憶質問紙(Everyday Memory Questionnaire, EMQ), 認知的失敗質問紙(Cognitive Failure Questionnaire, CFQ), 成人メタ記憶尺度(Metamemory Inventory in Adulthood, MIA)を採用した。EMQ, CFQ 及び MIA の評定値と DRM パラダイムにおける実験結果の関係について関連の点から検討していく。

方 法

実験参加者 実験参加者は大学生 95 名であった。

刺激材料 学習リストは宮地・山(2002)の DRM リストから 4 リストを選択した。再認リストは 1 リストにつき学習語 8 項目とクリティカル語 1 項目、未学習語 7 項目を用いた。

質問紙 EMQ, CFQ 及び MIA を使用した。EMQ については、全 28 項目に対して、出現頻度を 9 段階(1: 最近 6 ヶ月で 1 回もない～9: 日に 1 回以上)で評定することを求めた。CFQ については、全 25 項目に対して、過去 6 ヶ月における出現頻度を 5 段階(0: まったくない～4: 非常によくある)で評定することを求めた。MIA については、全 44 項目に対して、自己の適合度を 5 段階(1: まったくそのとおりに思う～5: まったくそうとは思わない), または出現頻度を 5 段階(1: まったくしない～5: いつもする)で評定することを求めた。

手続き 実験は大学の授業中に集団で行われた。学習セッションでは、16項目が1項目につき2秒の割合で4分割されたスクリーン上のいずれかの位置に呈示された。この時、呈示位置については無視し、単語のみを記憶することが求められた。

再認セッションでは、90秒の

間に、順序を問わず、記憶した単語をできるだけ多く正確に書き出した。その単語の呈示位置について、5つの選択肢(右上・右下・左上・左下・わからない)から一つを選択した。

再認セッションは1週間後に行われた。再認リストを印刷した紙が配布され、再認リストのそれぞれの単語に対して、学習セッションで呈示された単語であるかどうかを判断した。呈示された単語であると判断した場合には“あった”, 未学習単語であると判断した場合には“なかった”に丸をつけた。

“あった”に丸をつけた単語の呈示位置について5つの選択肢(右上・右下・左上・左下・わからない)から一つを選択した。

記憶実験の約1カ月後、EMQ, CFQ及びMIAを実施した。質問紙の冊子が配布され、回答の仕方が説明された後、自己ペースでの回答が求められた。回答時間は20～30分であった。

結果と考察

記憶実験における正再生率と虚再生率、再認の正確性、虚再認率を算出した。その結果を表 1 に示す。EMQ, CFQ 及び MIA の下位尺度の評定値の平均を算出した。さらに、それぞれの質問紙の下位尺度の評定値と記憶実験の結果との相関係数を算出した。それらの結果を表 2 に示す。

正再生率と CFQ の人名記憶の失敗因子の評定値の間には弱いながらも有意な負の相関があった。実験室場面における記憶成績が高い者ほど、人名記憶に関する失敗が少ないと知っていることが明らかになった。また、虚再生率と MIA の課題因子の評定値の間には弱いながらも有意な正の相関があった。MIA の課題因子は記憶課題や記憶過程に関する知識を表している。そのような知識が多いほど、虚記憶が増加していることが明らかになった。知識に基づき、関連づけやイメージを使用することにより、虚記憶が増加したのではないかと考えられる。さらに、虚再生率と MIA の能力因子の評定値との間に弱いながらも有意な負の相関があった。MIA

の能力因子は自己の記憶能力の評価を表している。自己評価が低いほど、虚再生率が高いことが明らかになった。記憶能力の自己評価が低いほど、既存の知識に頼る割合が高くなり、結果として虚記憶が増加するのではないかと考えられる。しかし、EMQ や CFQ におけるほとんどの下位尺度の評定値と記憶実験の結果との間には相関がみられなかった。これは実験室場面における記憶と日常場面における記憶が乖離していることを示唆している。

引用文献

宮地弥生・山 祐嗣 (2002). 基礎心理学研究, 21, 21-26.

付記 本研究は日本学術振興会科学研究費(課題番号 25380992)の助成を受けた。

表1 記憶実験の結果

	平均値(%)
正再生率	61.9
虚再生率	32.4
再認の正確性	48.3
虚再認率	88.2

表2 記憶実験の結果と日常記憶質問紙の評定値の相関係数 (* $p < .05$)

		評定値	正再生率 との相関	虚再生率 との相関	再認の正確性 との相関	虚再認率 との相関
EMQ	検索	3.41	.04	.01	.13	.09
	活動の記憶	4.53	.03	.05	.12	.03
	課題モニタリング	1.60	-.12	-.05	.02	.07
	会話モニタリング	3.31	-.04	-.02	.10	.15
	空間記憶	2.29	-.14	.14	.05	-.01
CFQ	空間的失敗	1.46	.07	.00	.11	-.05
	うっかり、ぼんやりの失敗	2.35	-.14	.03	.11	-.07
	検索失敗	2.27	.00	.08	.00	.13
	約束の失敗	1.58	-.15	.02	.08	.08
	人名記憶の失敗	2.25	-.22 *	.14	-.08	.10
MIA	変化	3.15	-.03	-.10	.03	.01
	課題	4.01	.10	.22 *	.10	.12
	能力	3.25	.13	-.22 *	-.01	-.09
	不安	3.77	-.02	.12	.07	-.04
	方略	2.91	.03	-.01	-.05	.06
	支配	2.72	-.14	.10	-.04	.05